

CAPS Newsletter

The Center for Asian and Pacific Studies, Seikei University

No.133 January, 2017

目次

〈アジア太平洋研究センター(CAPS)からのお知らせ〉

.....1

〈CAPS主催企画の報告〉

国際ワークショップ 〈アラブ文学との対話Ⅱ〉

記憶・声・土地 交差するアートワーク
一橋大学大学院言語社会研究科 佐喜真 彩.....2

〈共同プロジェクト紹介〉

アジア太平洋地域における

情動メディアとしての西洋音楽の影響

文学部教授 日比野 啓.....4

〈CAPS叢書紹介〉

『危機言語へのまなざし』(三元社)

文学部教授 石 剛.....5

〈CAPS研究員 研究内容紹介〉

〈生存の痕跡〉としての沖縄戦後史

CAPS特別研究員 上原 こずえ.....6

「歴史的類比」としての70年代米国の対外政策

CAPS客員研究員 永田 伸吾.....7

〈アジア太平洋研究センター(CAPS)活動報告〉.....8

アジア太平洋研究センター(CAPS)からのお知らせ

2016年度のCAPS主催国際ワークショップが盛会のうちに終了しました。



(左から、ジェナー・エル＝ハサン、セルマ・リュスト・プールピナ、ぱくきょんみ、崎山多美の各氏)

3名のアラブ文学者をお招きした2014年度ワークショップ「アラブ文学との対話 越境・表現・アイデンティティ」に引き続き、本年度は「国際ワークショップ〈アラブ文学との対話Ⅱ〉記憶・声・土地 交差するアートワーク」を開催しました。

2日間とも熱気に溢れ、6号館6階ロビーは、豊かな言葉が充満する不思議な空間に変貌しました。また、沖縄出身の若手アーティスト山城知佳子さんの映像作品〈土の人〉の上映も、大好評でした。

(報告は2ページより)



◀左より
山城知佳子氏、
砂川敦志氏



▲ロビーを使った会場のようす

CAPS 主催企画の報告

国際ワークショップ〈アラブ文学との対話Ⅱ〉記憶・声・土地 交差するアートワーク
一橋大学大学院言語社会研究科 佐喜真 彩

2016年12月3日(土)、4日(日)にわたって、「国際ワークショップ〈アラブ文学との対話Ⅱ〉 記憶・声・土地 交差するアートワーク」が開催された。三部構成の本ワークショップは、植民地の記憶の痕跡を残す諸地域の作家・アーティストが自作について語ることを中心に、脱植民地化に向けたアートの可能性を模索する試みであった。

第一部では、はじめに、これまでにアラビア語で三つの小説を発表した、レバノン出身の作家であるJana El Hassan (ジャーナー・エル＝ハサン)さんが、自身の作品の内容に言及しながら、政治の領域では成し得ないアートの力について語った。彼女は、中東の内戦が人々に残す傷跡の記憶を示唆し、その傷を表に出し、それに向き合っていく必要性を説いた。傷に向き合うという行為は、彼女の作品の中では、他者の見方から過去を生き直すという「対話」を通してなされるが、このようにアートは人生の問いに人々を導くものであり、心の傷を癒すプロセスであると述べた。

次に、哲学と政治学の両分野を修め、フランスのポスト植民地文化・ジェンダーを研究するSeloua Luste Boulbina(セルーア・リュスト・ブルビナ)さんは、アルジェリア人の父とフランス人の母を持つ自身の経験に触れながら、植民地の傷跡とは、自分のみならず、その前の世代の傷をも残したものであると冒頭に述べた後で、「植民地を哲学的に概念化する」ことを課題としてこれまで取り組んできた研究の軌跡を振り返った。彼女が強調したことは、脱植民地化の過程では言葉を持つことが必要であり、しかもそれは一人称であることが不可欠であるということであった。「独立は脱植民地化の始まり」でしかなく、歴史において三人称で語られてしまう被植民者が真にそれを志向するには、こうした他者から蔑まれる視線を内面化する傾向から抜け出さなければならず、そのための心理的な作業が求められる。そして、文学や芸術こそがその作業が行われる場であるという見解を示した。

ジャーナーさんの最新作『99階』の翻訳を務めたア

ラブ文学研究者の山本薫さんは、ポストコロニアル文学では、記憶に向き合うことが重要なテーマになるが、ジャーナーさんの作品は、そのような実践を他者の記憶を通して行っている点で優れていると評価した。沖縄現代史研究者の若林千代さんは、「植民地においては、承認というものはあり得ない」というセルーアさんの言葉や、またジャーナーさんの作品に描かれる、自分が生きてきた場所が他人のものになってしまうという記憶や経験に、自身の研究領域である沖縄の視点から共感を示した。

第二部は、沖縄出身の小説家の崎山多美さんと詩人および翻訳家である在日韓国人二世のばくきょんみさんが自作について語ることから始められた。崎山さんは、「あたかも日本語のように聞こえる言葉で話していますが」と標準日本語に対する批判的視点から前置きを述べ、14歳まで複数の離島の言語が使われる西表島に住んでいた経験によって培われた自身の言語使用の状況から、どのように小説を書くかという執筆に対する課題を述べた。また、死期を察した崎山さんの母が病床で宮古島の従軍慰安婦たちに対する記憶を、明瞭な言葉で何度も彼女に伝えたことが、その後の作品の根幹に関わることになったと、辛い経験を語ってくれた。済州島出身の両親を持つばくきょんみさんは、エリートの道を進む父と自分の出自を蔑みながら生きる母の結婚について語り、そのような母や父の姉の両方が自滅した人生を送ったことや、海女であった彼女の祖母の経験を背景に書いた詩「何処何様如何草紙7—済州島きれぎれ」を朗読した。最後に、「在日の言葉はあるのだろうか。言葉なんてみんな他人の言葉であるから、その他人の言葉に向かうことから自分の言葉が生まれる」という言葉で締めくくった。

英文学研究者の中井亜佐子さんは、エドワード・サイードが危惧していたように、テキストを非常にわかりやすいフォーミュラに落とし込む風潮がある現代に抗うかのように、二人の作家は言葉にある他者性に対する鋭い意識を持っており、その

所有をめぐる問いが作品の中に貫かれていることを指摘した。近代日本文学研究者の佐藤泉さんは、崎山さんの作品には固定されるものとされないもののあわいが表現されていると述べ、ぱくさんの実践は言葉になりきらないところからの詩作行為であると指摘した。佐藤さんが述べたように、現代が他人の記憶を記憶することが求められる時代であるなかで、どちらの作家も自分のものでない記憶を自分の身体を介して記憶することを実践されていると感じた。

二日目に行われた第三部は、沖縄出身の現代アーティストである山城知佳子さんと彼女の作品の制作に携わった映画監督の砂川敦志さんが、最新作〈土の人〉(2016)の制作背景について語った後、



参加者それぞれが当作品を主題に、前日からの議論も含めて感じたことを言葉にする時間となった。冒頭で、司会を務めた李静和さんから、設置される場によって異なる顔を表すインスタレーションという形式についての言及があり、そのような「生き物」の性質を理解し、それを生かすことへの配慮を持って展示をされた宮崎大樹さんへの感謝の言葉が述べられた。山城さんは、前作の〈肉屋の女〉(2012)と〈土の人〉に連続するテーマである生命の循環のイメージから話を切り出した。〈土の人〉では、映画制作の技術を導入し、視覚だけではなく音や声を表現の中心的要素として取り上げようと試みたために、これまで一人でカメラをまわして作っていた制作スタイルから、様々な人々と協同で作品を作るという経験に繋がったと述べた。「自分一人ではつくれなかった」「たくさんの人々に手助けしてもらって形になった」という言葉を山城さんは幾度か口にしたが、その「たくさんの人々」には、〈土の人〉の制作に携わった専門技術を持つ多くのスタッフのみならず、当作品の中で示唆される様々な地域で生き、そしてその記憶を後の世代に残してきたあらゆる人々が含意されているのだろうと感じた。インスタレーションと共に作品として配布された「テキストの全てが1920-30年代の韓国の植民地時代の詩である」と

いう李さんの指摘のように、〈土の人〉には、抑圧の中で生を取り返そうとする多様な土地の多くの人々の記憶が折り重なっている。さらに、その作品ではそうした人々の記憶が別の人へと受け継がれることで、集団的な新しい生が生み出されようとする運動が表現されているように思えた。このようにあらゆる他者の記憶を重層的に宿した作品〈土の人〉は、ある時点から他者の存在が不可欠となった山城さんのこれまでの一連の作品が必然的に行き着くものだったのではないかと思う。日本

美術史・視覚文化を研究されている池田忍さんもまた、特に〈あなたの声は私の喉を通った〉(2009)を挙げながら、山城さんのこれまでの作品から〈土の人〉にわたって通底するテーマとして他者の存在

を見出し、前日の議論と結び付けながらコメントした。

〈土の人〉に対して様々な意見が出されたが、なかでも特に印象的だったコメントは、まさに今問題となっている「土人」発言に対する繊細な抗いとして、この作品が存在するというものであった。このコメントを受けて私は、〈土の人〉は、前日のセルアさんが強調した一人称の語りを練り上げようとしてきた多くの人々による作品として捉えられるのではないかと思った。言い換えれば、植民者による三人称を使った呼びかけの言葉に抗うために、人々がこれまで粘り強く営んできた心理的作業が、山城知佳子というアーティストの作品を通して顕在化しているのではないかということである。また、こうした他者との対話、そして共同作業を通じて一人称を希求する行為は、山城さんのみならず、ジャーナーさん、崎山さん、ぱくさんのアートにおいて、共通して実践されているのではないかと感じた。最後に、様々な研究領域を持つ人々が対話を交わすことの必要性はもちろんだが、本ワークショップのようにアーティストと研究者という表現のスタイルが異なる間でも共に学び合う機会を持つことが、より豊かな知見を生んでいくのだろうと改めて実感した。

〈共同プロジェクト紹介〉

アジア太平洋地域における情動メディアとしての西洋音楽の影響

文学部教授 日比野 啓

2016年度から3年間の共同プロジェクト「アジア太平洋地域における情動メディアとしての西洋音楽の影響」を開始した。メンバーはバーナビー・ラルフ（文学部准教授）、ヘンリー・ジョンソン（ニュージーランド国立オタゴ大学音楽学部教授）、そして私の三人である。このプロジェクトの目的は、アジア太平洋地域において西洋音楽がどのように人々の感受性に影響を与えてきたか、情動（affect）理論の最新の知見に基づき再検討をはかるものだ。

西洋音楽が非西洋地域に与えた種々の影響、とりわけ西洋文化を取り入れることが近代化の一環として考えられた国々での影響については、これまで数多くの研究がある。また長崎・島原におけるグレゴリオ聖歌の伝承のように、近代化以前の非西洋国家においてキリスト教の宣教師が西洋音楽を伝えたことはよく知られている。本共同研究は、近年進展を見せる情動理論の知見をもとに、これらの先行研究とは違った角度からアジア太平洋地域における西洋音楽の影響を研究調査する。

一般に、音楽のもたらす情動は直接身体に働きかけ、私たちの硬直した思考を「武装解除」することを私たちは経験からよく知っている。音楽以外の西洋文化の輸入、とりわけ文字を介したかたちでの西洋文化の輸入には様々な心理的障壁があったのに対し、音楽が非西洋地域に相対的に「入り込みやすかった」のはそのためだろう。日本においても、「欧米風のものの考え方」に抵抗を示す、漢学の素養を持った伊澤修二（初代文部省音楽取調掛担当官）や目賀田種太郎（東京音楽学校創設者の一人）のような知識人が、西洋風の音楽教育に熱心に取り組んだ。また、音楽というメディアの可搬性（portability）と複製可能性（reproducibility）もその伝播力の強さに一役買っていることにも注目しておく必要がある。たとえば西洋演劇の非西洋地域への移植は実際の舞台を観たことがない観客相手に困難を極めたし、西洋絵画ですら（複製手段がごく限定されていた時代ゆえに）「本物」を

見せて説明することは難しかった。文字を介さないメディアのなかで、西洋音楽だけが楽譜というかたちで簡単に持ち運べ、また（持ち運べる楽器の数や大きさには限りがあったが）演奏という点でも容易に複製が可能になるものだった。その意味で西洋音楽は非西洋地域を「西洋化」するための尖兵だった、と言えるだろう。

その一方で、西洋音階、とりわけその長調と短調の区別が非西洋人にはわかりにくかったように、西洋音楽を理解し受容する感受性ないしは「耳」を非西洋人が最初から持ち合わせていたわけではないことも先行研究は明らかにしている。私たちの感受性はその地域の文化によって強く規定されており、西洋文化への憧れなしに西洋音楽を「いいもの」「耳に心地よいもの」と思うことはできない。それでも（比喩的にいえば）「目を閉じて」視覚を通じての西洋文化の影響を拒絶することはできても、「耳をふさぐ」ことは不可能である。非西洋地域において、西洋音楽は次第にその日常生活に浸透していき、現地の人々の「耳」をほとんど強制的に変えていく。日本のように洋楽教育が国家によって取り入れられていない場所においてすら、西洋音楽とそれがもたらす情動は伝達され変遷していく。このような見取り図に沿って、各人はそれぞれの専門領域について具体的な研究調査を行い、その成果を英語刊行物としてまとめる予定である。

第一年度となる本年度は第一回の研究会を10月8日に行った。研究会の発表内容要約など、詳しい内容はウェブサイトひびのぶろじえくと（<http://projects.khibino.net>）に随時掲載しているので、関心のある向きはこちらを参照してほしいが、東京藝術大学講師の源中由記氏による“Like Some Cats from Japan: David Bowie, Kansai Yamamoto and Japan's First Appearance in the History of Rock Music”では、昨年亡くなったミュージシャン、デヴィッド・ボウイのコンサートにおける山本寛斎デザインの衣裳において「日

本」が表象される意味を探り、日比野による“*What Americans Learned in Scarlett (1970): The Mirroring Effect of Intercultural Collaboration*”では、1970年1月に初演された菊田一夫作の東宝ミュージカル『スカーレット』が、作曲家にハロル

ド・ローム、演出家にジョー・レイトンを合衆国から招聘して、日本においてはじめて統合ミュージカルを上演しようとした試みについて論じた。次回の研究会は来年1月28日に開催される。参加来場をお待ちしています。

CAPS 叢書紹介

『危機言語へのまなざし』(三元社)

文学部教授 石 剛

本書、『危機言語へのまなざし』は、アジア太平洋研究センターのグループ研究プロジェクト3年間国際共同研究の成果として結集されたものである。サブタイトルにある「中国における言語多様性と言語政策」を見ても分かるように、「危機言語」というキーワードをめぐり、主に中国の現実的言語状態と言語政策を取り上げ、その背後にある言語意識・言語思想を深く掘り下げたものである。跋にも記されたように、研究を進めていくうちに、次の点に関心が集められた。つまりここで言っているその「危機」とは、一体どのようなものなのか？と。

ある特定の言語が消えてなくなる危険に曝されている、というのが本来の意味だが、果たしてこれがまるで対岸の火事として、その言語だけが危機に瀕しているのであって、我々自身が安泰そのものであり、特にかかわりを持ちたくなければ、別に痛くもかゆくもないような、いわば他人事にすぎないだろうか。かつて金子亨(故人)という言語学者がいて、『先住民族言語のために』(草風館1999年)という本の「あとがき」にこう書いている。「言語の危機状況をあらわすのに *noribound* という言葉がある。『死ぬに決まった』という意味である。私はこのことばを憎む。私が先住民族ならば、『そんなことを他人に決められてたまるか』と憤慨するだろう」と。

しかし、母語の継承が途切れてしまいそうな言語は、事実上、やはり危ない。現に、我々は毎日のようにとまでは言わなくても、時々、どこかのある言語の話し手、それもその最後の一人か二人がいなくなったというニュースが耳にする。もちろんそのほとんどは、我々の知らぬ存ぜぬのうち

に消えたのである。それでも、金子氏は、これが「人の言語をこのように決めつけるのは単に礼を失しているだけではなく、母語を捨てる権利を含む言語権に対する重大な侵害だ」という。

権利の侵害は確かに由々しい問題だが、そもそ

も「権利」は、例えば「人権」概念のように、天か神様からいただけるような代物のようなイメージがあり、当たり前のものであり、人々に安心感を与えてしまう場合がある。それは思考停止、抗争の停止に拍車をかけているだけの役割を果たしているに過ぎないともいえる。危機言語の話し手に言語権があるからと言って、かつての誰も守ってくれなかったのではないか。そこに *noribound* という運命を背負っていかざるをえないとい

う現実がある。

どこかにそれに乗り越える道はないだろうか。思うに、この場合は、まず危機言語の復興にかかわるすべての因果関係を洗い出して、危機言語、少数言語と、我々の住む世界、それに人類との関連性を根本から考えなおさなければ、救いの道も開かないだろう。佛教的な表現でいえば、世間のことは、いろいろと目に見えない深層な原因と結果で繋がっており、一切の相関関係である「因縁」にあるという。感じるべきはこれであろう。

我々は危機言語という問題を、世界全体との相関関係、それを人類全体の問題、つまり「因縁」として受け止めるという意識の欠如されたまま、あれこれと議論していないのか。外部から「救世主」的な存在としてでもなければ、ボランティア的な発想からでもなく、我々自分自身の問題として取り組むように、という観念が広く生まれてくるま



で、その環境整備がかなめとなるのではないかなと思われる。

しかし、問題はそう簡単ではない。生物多様性や言語多様性の思想に象徴されているように、人間とは自然と環境に対して止まることの知らない傲慢さを含め、言語に対する認識も根本から考え直さない限り、その行く手が阻まれてしまうのである。グローバル化と言いながらも無数に分断されている我々の住む世界を見れば分かるように、危機言語問題と人類全体との関連性に対する自覚は、如何に欠乏されているかが火を見るよりも明

らかである。これこそが人類の直面している危機的な状況となっている。言語に限って言えば、まさに「言語意識の危機」というほかはない。その意味において、本当に危機に瀕しているのが、どこかの何かの言語というより、むしろ我々の意識である、と言える。根本から発想を改める時が来ているように思えてならない。それが直接的に我々の生存そのものに関連しているからである。

中国と日本の第一級の研究者たちによる共同研究成果であるこの書が広く読まれることを期待してやまない。

CAPS 研究員 研究内容紹介

〈生存の痕跡〉としての沖縄戦後史

CAPS 特別研究員 上原 こずえ

私はこれまで、沖縄島東海岸金武湾への石油備蓄基地の建設と、それに伴う海の埋め立てに抵抗した金武湾闘争（1973-1985）についての調査・研究を行ってきた。

第二次世界大戦後の高度経済成長を推進した日本政府・企業は1970年代以降、「技術移転」や「経済開発」の名の下に、東／東南アジア諸地域への公害産業の拠点を移し、1980年代前半は、ミクロネシアの島嶼が近接する太平洋沖に核廃棄物を投棄することを計画した。これらの地域においては、環境や生命への脅威となる動きに対して、反開発・反核の抵抗運動が出現し、さらにそれらは同時代の世界的な反核運動と連動していた。

アジア太平洋における反開発・反核の運動が共鳴し合うなかで、金武湾闘争は、軍事・資本に伴う暴力が支配する空間としてあった沖縄の戦後をどのように照射し、「復興」や「成長」といった「近代化」に対峙する生と抵抗運動の可能性をどのように示唆していたのか。以上のような問題意識のもとに、博士論文「1970－80年代の沖縄・金武湾闘争―「近代化」を問う民衆運動とその「生存」思想」においては、沖縄の戦後の抵抗運動と「近代」を問う地球規模の動きが交錯するなか、金武湾闘争がいかに組織されたのかを記述した。収集した史資料は、金武湾闘争を組織した「金武湾を守る会」（1973年9月結成、世話人・崎原盛秀氏）が保管中の「金武湾を守る会」の機関紙『東海岸』や同時代の新聞・雑誌記事、金武湾を守る会の周辺にお

いて組織されたさまざまな反開発運動の刊行物、そして金武湾を守る会またはその個々人と交流のあった国内外の運動団体に関する文書資料であった。さらに運動に参加した個々人への聞き取りを行い、運動史の形成において特に重要であると思われる人物については聞き取り調査を継続して行い、同時にその人物による文書資料を収集してきた。

資料や口述記録の分析を通じて、金武湾闘争を組織した彼ら／彼女らが、運動が組織される以前からの経験や思想を蓄積してきた連続する主体であったことを描き出した。と同時に、彼ら／彼女らは「個」として抵抗運動に課題を見出し、生き方を模索したこと、金武湾闘争が一つの終わりあるものとしてではなく、「個」のなかで連続し変化する課題への一人ひとりの取り組みであったことを明らかにしてきた。博士論文執筆後も、特に世話人の崎原盛秀氏については聞き取り調査を続けてきたが、これまでの研究には、個人からみた世界観により構成された個人史の運動との関係性を析出するに留まっているという限界があった。幼少期の大阪在住や施政権返還前の復帰運動の組織化に伴う本土渡航を経験した崎原盛秀氏などの個人史には多様な出来事や人物との遭遇があるが、個々人の経験と交錯した歴史の意味をどのように捉え直すことができるのか。現在の研究課題は、個人史と出来事との関わりをもう一度辿りなおすこと、特にトランスナショナルな移動経験とその

蓄積を、世界史的な視座から再考することである。具体的には戦争－戦後期を生き抜いてきた人々の群像と、人々をとりまく国家・資本・戦争をめぐる構造的変動を描き出す方法を提起したい。現在は、具体的には崎原氏やその他の金武湾を守る会会員ら本人や家族の戦時の移動の足跡、および戦前、戦後に各地で遭遇した出来事や人々について記述している。金武湾沿岸地域に生きてきた人々にとっての近現代における離散経験の意味を考察し、離散経験を繰り返してきた人々が自ら経験した出来事の記憶と意味を抱え持ちながら生き

続け沖縄の戦後史・社会運動史を形成してきたということを論じ、沖縄戦後史の経験を現在に、そして世界に続く問題として提起することが課題である。

こうした作業を通じて＜沖縄戦後史＞を沖縄という地に限定された事象としてではなく、戦前、戦時、戦後を通じて、人びとが渡ったそれぞれの地、または「沖縄」が結ぶ各地における出会いや経験の一つ一つが織りなす歴史の総体として捉えなおしたいと考えている。

「歴史的類比」としての70年代米国の対外政策

CAPS 客員研究員 永田 伸吾

グアム・ドクトリンやブレトン・ウッズ体制の崩壊、そして産油国の台頭など、第二次世界大戦以降に米国主導で形成された国際秩序は1970年代に大きな変容を迎える。そのため当時の米国の指導者の主な課題は、国際環境の複雑化と資源的制約という条件下での超大国米国の再定義であった。そして、このような課題は、現在の米国の指導者が直面している課題と多分に共通する面がある。

本来、「歴史的類比」の適用には慎重さが求められることは論を俟たない。しかし、1970年代の米国の対外政策についての検討が、今後の米国の対外政策の行方を考察する上で有益な示唆をもたらす可能性も否定できない。このような問題の所在から、筆者は1970年代の2つの米国の外交安全保障上の事象に研究上の関心を寄せている。

第1は、ヴェトナム戦争以降の1970年代後半の米国・ASEAN関係についてである。1977年のASEAN・米国対話パートナーシップの構築にはじまり、1979年には、ASEAN拡大外相会議(PMC)が開始されるなど、この時期、米国・ASEAN関係の制度化が進んだ。その一方で、ASEAN加盟国であり米国の公式同盟国でもあるタイで反米感情が高まり、それは在タイ米軍撤退の理由の1つとなった。また、フィリピンでは在比米軍基地の主権をめぐる基地協定改定交渉が難航した。現在の米国も、発足当初からアジア重視政策を掲げたオバマ政権下で、米国・ASEAN関係は大幅な進展をみせた。さらに、政権後期には米比防衛協

力強化協定締結や対越武器禁輸の全面解禁など、ASEAN加盟の同盟・パートナー国との連携強化が進んだ。しかし、フィリピンのドゥテルテ政権発足による米比関係の悪化は、防衛協力強化協定の行方に不透明感をもたらしている。

第2は、「(第2の) オフセット戦略」と呼ばれるITの活用による先進非核兵器体系構築を目的とした対ソ国防戦略についてである。1970年代は、科学技術予算の削減によるアポロ計画の終了にみられるように、マンハッタン計画以来の巨大科学志向の米国の科学技術政策が曲がり角を迎えた時代であった。他方で、「ムーアの法則」に象徴される1960年半ばから長足の進歩を遂げ始めたIT関連予算については増加傾向にあった。また、1970年代後期にカーター政権の国家安全保障問題担当補佐官として対ソ封じ込め政策を主導したズビグニュー・ブレジンスキーは、*Between Two Ages: America's Role in the Technetronic Era* (邦訳『テクネトロニック・エージ：21世紀の国際政治』)を1970年に上梓し、いち早く情報化社会の到来とそれが国際関係に与える影響について予測した。このように「(第2の) オフセット戦略」の推進には、国際環境とともに当時の米国の科学技術政策や社会状況が色濃く影響を与えていた。そして、1970年代同様に資源的制約下にある現在の米国では、「(第2の) オフセット戦略」を教訓に、ロボティクスや人工知能など先進技術を活用した「第3のオフセット戦略」が国防戦略として推進されているのである。

このように、今後の米国の対外政策の行方を考察する上での有益な示唆や比較の視座の提供という点から、以上の2つの事象を「歴史的類比」として検討することには重要な学術的意義があると考ええる。他方で、両テーマの研究方法は必ずしも同じわけではない。第1の関心テーマについては、一次資料の渉猟などオーソドックスな歴史学的アプローチが中心になる。それに対し第2の関心テーマについては、科学社会学や科学技術社会論など

の学際的研究分野からのアプローチも有効であろう。

現在、筆者はこの2つの研究テーマを同時に進めるといいういささか無謀な試みをしている。しかし、根源的な問題の所在は同じであり、その意味で何らかの相乗効果を生み出すことも課題であると考えている。それがどのようなものになるのかは現段階では分からない。息長く取り組んでいきたい。

アジア太平洋研究センター(CAPS)活動報告(2016.9.16～2016.12.15)

公開講演会、研究会、研究出張などの記録

◇9月25日(日)センタープロジェクト国内出張(25日まで)
出張者1:田浪 亜央江(センター主任研究員)
出張者2:上原 こずえ(センター特別研究員)
調査地:愛知県
目的:12月のシンポジウム上映予定作品の事前確認・関連作品下見

◇10月1日(土)センタープロジェクト研究会
「グローバル・ジャスティスの模索とローカリティ」
発表者:岡田 泰平 楊 海英(大野 旭)
参加者:9名

◇10月8日(土)センタープロジェクト研究会
「アジア太平洋地域における情動メディアとしての西洋音楽の影響」
講演者:源中 由記 日比野 啓
参加者:5名

◇10月16日(日)センタープロジェクト国内出張(16日まで)
出張者:三田 奈穂(法学部助教)
調査地:京都府
目的:法制史学会近畿部会へ参加のため

◇11月16日(水)センタープロジェクト海外出張(22日まで)
出張者:渡邊 大輔(文学部准教授)
調査地:アメリカ
目的:ニューオリンズにて開催されるアメリカ老年学会大会にて報告を行うため

◇11月19日(土)センタープロジェクト研究会
「認知言語学の新領域開拓研究—英語・日本語・アジア諸語を中心として」
講演者:井川 壽子 長谷川 明香 本多 啓
八木橋 宏勇

参加者:9名

◇12月3日(土)・4日(日)センター主催国際ワークショップ
「アラブ文学との対話Ⅱ 記憶・声・土地 交差するアートワーク」

ゲスト:ジャーナ・エル＝ハサン
セルア・リュスト・ブルビナ
崎山 多美 ばく きょんみ 山城 知佳子
砂川 敦志

コメンテーター:
池田 忍 鵜飼 哲 佐藤 泉 中井 亜佐子
山本 薫 若林 千代

参加者:延べ160名

◇12月9日(金)センタープロジェクト国内出張(11日まで)
出張者:森 雄一(文学部教授)
調査地:山口県
目的:日本語用論学会出席のため

運営委員会・所員会議開催の記録

10月4日(火) 第4回所員会議
10月6日(木) 第4回運営委員会
11月4日(金) 臨時所員会議
11月7日(月) 臨時運営委員会

CAPS Newsletter No.133

2017年1月15日発行

編集発行:成蹊大学アジア太平洋研究センター
〒180-8633 東京都武蔵野市吉祥寺北町3-3-1

☎ 0422-37-3549 (ダイヤルイン)

FAX 0422-37-3866

E-mail: caps@jim.seikei.ac.jp

Web: <http://www.seikei.ac.jp/university/caps/>